

病院連携で急性期対応

岩手県に住む50歳代の会社員男性は昨年11月中旬の午後8時頃、自宅でテレビを見ていたら、激しい胸痛に襲われた。実父ら親族3人が心筋梗塞の経験者であることを思い出した。「もしかししたら自分も」と不安になった。

心臓の組織に酸素や栄養を送る太い血管が詰まり、この組織の一部が死ぬ、命に関わる病気だ。妻は県立

岩手県に住む50歳代の会社員男性は昨年11月中旬の午後8時頃、自宅でテレビを見ていたら、激しい胸痛に襲われた。実父ら親族3人が心筋梗塞の経験者であることを思い出した。「もしかししたら自分も」と不安になった。

心臓の組織に酸素や栄養を送る太い血管が詰まり、この組織の一部が死ぬ、命に関わる病気だ。妻は県立



岩手県内で心臓病の急性期医療体制を整えた森野さん（奥）ら（岩手医大病院提供）

医師は検査室から岩手医大病院（矢巾町）の循環器内科に電話で直接連絡。電子カルテを共有しながら相談したところ、「右手首からカテーテルを入れたら

どうか」と助言を受けた。その通りに行うと、3本ある太い血管の1本に、詰まっていた部分が3か所見つけた。心筋梗塞だった。治療が難しい事例だったため、翌日、救急車で2時間ほどの岩手医大病院に搬送された。血管を広げて金属で支えるステント治療を受け、今は胸痛もなく元気に働く。「二つの病院の連携が良かったおかげで助かった」と男性は話す。

手術などが必要な急性期治療は、専門的な知識と技術が医師に求められるが、心臓病の専門医を津々浦々に配置するのは不可能だ。北海道に次いで面積が広い岩手県では、病院連携による急性期医療体制を整備している。

心筋梗塞患者は、岩手医大病院を派遣している県立病院など11の病院が受け入れる。ただし、重症例や

手術などの判断に困った事例は、岩手医大病院循環器内科の医師が「テレカンファレンス（遠隔会議）」で助言するか、同病院が受け入れて治療する。

体の中心を貫く大動脈の壁の内側が急激に裂ける急性大動脈解離は、心臓外科医が常勤する病院でないと対応できないため、岩手医大病院が県立中央病院（盛岡市）に救急搬送する。

また、宮古市や二戸市などでは、救急車から心電図を病院に伝送するシステムを導入。病院は患者到着前から準備し、診断から治療に移る時間を大幅に短縮することに成功している。

岩手医大病院循環器内科教授の森野禎浩さんは「時間が勝負の心臓病治療は対策が不十分だと治療成績は向上しない。医療者・病院の連携と情報通信技術（ICT）の活用がカギを握る」と話している。



*過去記事はヨミドクターで